

Eduvolution

令和7年度千葉県教育庁教育振興部
学習指導課ICT教育推進室発行

教育 (Education) × 進化 (Evolution) の造語
「ICT」を効果的に活用することで、
教育の次なるステップを目指しましょう。



※県教育委員会ホームページのICT教育のバナーにアクセスしてください。
<https://www.pref.chiba.lg.jp/kyouiku/shidou/giga/jouhoukeikaku.html>

遠隔教育の活用はどうでしょうか？ 学習機会の充実を図る視点

先日公表された「県立高校改革推進プラン・第2次実施プログラム（案）」においても示されたように、遠隔教育の活用は、今後の教育の重要な柱の一つとして位置づけられています。

県教育委員会では、**様々な理由で学校に登校できていない中学生の皆さんに向けた、オンライン授業配信「エデュオプ ちば」を令和6年6月にスタートしました。**

この事業は、**不登校児童生徒の教育機会の確保を目的**としており、自宅に限らず、インターネット環境が整っていれば、どこからでも受講することができます。

また、**令和7年4月からは、対象を中学生だけでなく、小学4年生～6年生まで拡大し、より多くの児童生徒が利用できるようになりました。**

授業は小・中学校の各学年のカリキュラムを用意し、専任の講師が担当します。時間割の基本は、午前2時間・午後2時間で、教科は国語、社会、数学（算数）、理科、英語の5教科の授業を実施しています。そのほか、今年度からは、ヨガやダンスの授業も実施しています。

児童生徒は、顔や声を出さずにハンドルネームで授業に参加し、講師からの質問にチャットで答えたり、リアクションマークでコミュニケーションをとっています。

事業の詳細につきましては、千葉県教育委員会のホームページにてご案内しておりますので、ご興味のある方はぜひご覧ください。

エデュオプちば 時間割（中学校）

時 程	
1時間目	10:20 ~ 11:00
2時間目	11:20 ~ 12:00
3時間目	13:00 ~ 13:40
4時間目	14:00 ~ 14:40

1年	月	火	水	木	金
1	数学	国語	理科	数学	英語
2	国語	理科	国語	英語	数学
3	社会	数学	英語	国語	理科
4		英語	社会	社会	

2年	月	火	水	木	金
1	理科	英語	社会	英語	数学
2	社会	数学	英語	国語	理科
3	国語	理科	国語	社会	英語
4		国語	理科	数学	

3年	月	火	水	木	金
1	社会	数学	英語	国語	理科
2	数学	国語	理科	社会	社会
3	理科	英語	社会	数学	数学
4		理科	国語	英語	英語

ダンス・ヨガの授業を以下の日程で木曜日の15時00分～15時40分から実施します。
5月1日(木)・22日(木)、6月5日(木)・19日(木)、7月3日(木)・17日(木)
9月4日(木)・25日(木)、10月9日(木)・30日(木)、11月13日(木)、12月4日(木)
1月8日(木)、2月5日(木)、3月5日(木)

※申込方法や時間割など、
詳細は以下の県ホームページに掲載しています。



北海道高等学校遠隔教育システムの活用状況

千葉県教育委員会は、令和7年7月24日・25日に北海道を訪れ、「北海道高等学校遠隔授業配信センター」の視察を行いました。

北海道では、少子化と地理的特性の影響により、1学年1学級の小規模校が増加し、教員定数の減少による履修科目の制限が課題となっています。こうした**教育機会の格差が進路選択に影響を及ぼすことを防ぐため**、令和3年に札幌市の北海道有朋高等学校内に「T-base（遠隔授業配信センター）」が設立されました。

このT-baseからは、小規模校に向けて遠隔授業を提供し、教育機会の均等化を図っています。現在、専任教員24名が在籍し、32校・約950名の生徒が授業を受講しています。提供されている科目は、9教科30科目に及びます。

授業では、クロマキー合成を活用し、背景に資料や映像を映し出すなど、対面授業に近い演出も取り入れられています。さらに、授業だけでなく、難関大学志望者向けの講習や、看護・公務員セミナーなど、多様な進路支援も行われているとのこと。



クロマキー合成…
グリーンバックに他の画面
を合成すること。

遠隔教育を実践していくために

これまで遠隔教育について紹介してきましたが、大掛かりな仕組みを使用しなくても、遠隔教育の実施は可能です。例えば、**Zoom、Microsoft Teams、Google Meetなどのオンライン会議アプリを活用すれば、教室と教室以外の場所を簡単に**つなぐことができます。

教室に入れない児童生徒への、学習機会を保障する手段として、別の場所とつなぐ取り組みはすでに、多くの場面で実践されています。実際には、授業を行っている教室と自宅や別室をオンラインで接続し、リアルタイムで授業を進める形が一般的です。このような取り組みにおいて課題となるのは、双方向性の確保が難しい点ですが、生徒側の応答やチャット機能などを活用することで、ある程度の双方向性を確保できます。

さらに、こうした活用は不登校支援にとどまらず、**市内の小中学校間でのオンライン交流や、海外との国際交流など、さまざまな場面での応用が期待されます。**